

平成20年度宮崎県大学図書館職員研修会実施要領

テーマ：「利用者にとって魅力ある図書館とは」

1 目 的

先進的な取組を実施している図書館の情報を取り入れた研修を実施することにより、図書館職員の資質やスキルアップを図り、これからの図書館サービスの充実に資する。

2 対 象

宮崎県大学図書館協議会加盟館職員等

3 主 催

宮崎県大学図書館協議会

4 日 時

平成20年10月17日（金）10：00～15：00

5 場 所

宮崎大学附属図書館 3階 視聴覚室

6 研修内容

（1）あいさつ 10：00～10：05

宮崎県大学図書館協議会会長館（宮崎大学附属図書館長） 碓 哲雄

（2）講演1 10：05～12：00

「目指したい！“学び”のプロセスを支援する大学図書館」

講師：財団法人大学コンソーシアム京都

事務局次長（同志社大学所属） 井 上 真 琴 氏

昼 食

（3）講演2 13：00～15：00

「図書館力で“魅せる”職員のつくり方」

講師：財団法人大学コンソーシアム京都

事務局次長（同志社大学所属） 井 上 真 琴 氏

井上 真琴（いのうえ まこと） 氏 プロフィール

1962 年京都市生まれ。

同志社大学文学部卒。

1986 年以来、同志社大学職員として教務事務、システム開発、図書館業務に従事し、図書館ではレファレンスサービス・選書業務を担当する。

学生の図書館活用能力向上を祈念し、ちくま新書『図書館に訊け！』を刊行し、2007 年度私立大学図書館協会賞を受賞した。

国立情報学研究所「大学図書館職員研修」、同志社大学社会学部嘱託講師（科目名：学術情報利用教育論）などを務める。

2008 年度からは（財）大学コンソーシアム京都にて、京都地区の高等教育政策の企画・調査業務を担当している。

講 演 概 要

講演 1. 目指したい！“学び”のプロセスを支援する大学図書館

「学士課程の構築」や教育の「質」の保証が問われるなかで、大学図書館の学習支援の潮流は加速する方向にある。大学図書館が総合学習機能を発揮するための基盤と視軸はどこにあるのか。その課題を考える。

講演 2. 図書館力で“魅せる”職員のつくり方

学習支援を実質化するには、今後どのような職能を開発することが私たちに求められるのだろうか。レファレンス、学術情報リテラシー講習会、選書の在り方、システム設計づくりへのヒントを語る。

平成 20 年度宮崎県大学図書館職員研修会参加報告

講師：井上 真琴 氏（同志社大学嘱託講師、大学コンソーシアム京都事務局次長）

平成 20 年 10 月 17 日（金）10:00～15:00；宮崎大学附属図書館

報告者：本館利用係 井川友利子

Abstract 作製 碓 哲雄

講演 1. 「目指したい！“学び”のプロセスを支援する大学図書館」

大学での教育、学習環境の変化と、それに対して図書館はどう関わっていくのか、いかに図書館の存在価値を示すかということ、またそのための戦略について話があった。同志社大学では教育 GP の獲得に力を入れており、それに図書館が積極的にコミットしている。

入学事前教育・初年次教育：

「学生と教員の幸せな出会いを目指す導入教育」（2007 年度特色 GP）；入学前教育のサポート

PBL 教育（Project/Problem Based Learning）：

「政策提案能力を養う理論と実践との交流教育」（2008 年度教育 GP）

「プロジェクト科目」ではグループワークが中心となることに着目し、同大図書館は「場」としての図書館を提案し、ラーニングコモンズを 2013 年までに作る予定である。

ラーニングコモンズ：

（資料：大学図書館におけるネット世代の学習支援（<http://current.ndl.go.jp/ca1603>：国立国会図書館）

ラーニングコモンズとは創造的学習作業スペースとして、①情報機器と図書館資料の融合利用②レファレンス等の人的サービス③話せる閲覧室④アメニティの工夫（Café や談話室）の機能を持つ。

このようなラーニングコモンズ出現の契機のひとつとして、近年の入館者数の減少があげられる。電子ジャーナル等 web リソースの発展により来館する必要が少なくなったが、学習形態の変化により、グループワーク、ディスカッションのための機能的要求が多くなり再び人が集まる「場」としての図書館とそれに対応できる職員の能力が志向されるようになっていく。

講演 2. 「図書館力で“魅せる”職員のつくり方」

今日では誰もが容易に情報にアクセスでき、情報発信できるようになった。この情報過多の時代において図書館は従来の資料提供に加え、多すぎる情報を整理し、多様な情報源の使い分けを指南する役割を求められている。そこで重要視されるのがレファレンスサービスである。

レファレンス質問の傾向：OPAC、Nacsis-webcat の浸透により、単純な所蔵調査に関する質問は激減しているが、個々の質問が高度化し回答に要する時間が長くなっている。また、問題解決プロセス全体を包含し、長期にわたって支援が必要となる相談が多くなっている。

情報検索の課題：図書館員がレファレンスインタビューの過程で利用者の質問を解きほぐし、問題解決へと誘導する役割を求められる。これまでは、図書館員が情報の評価をしないこととされてきたが、情報検索の多様な方法、多様なソース、チャンネルが存在する現在においては、図書館員が適切な評価を下しつつ、最終判断は利用者に委ねるという姿勢へ変化せざるを得ない。

レファレンスの技能：今後の図書館員に問われる能力である。単にツールを知っているだけではなく、“「調べ方」の考え方”、メタレベルの情報認知能力を身につけなければならない。

以上。